海老名郷土かるたと昔話

海老名郷土かるた

問教育総務課 ☎046(235)4925

ことしの干支「午」に合わせ、市内に点在する史跡や文化財などを詠んだ「海老名郷土かるた」から、「う」「ま」の札と、「うま」にまつわる昔話を紹介します。

移り来た勝瀬とともに鳳勝寺

鳳勝寺

昭和17～19(1942～1944)年に相模ダム建設のため旧津久井郡日連村勝瀬(現相模原市緑区)の住民が海老名に集団移転した際に、ともに現在地に移設した寺院です。

【擬木柱所在地】鳳勝寺境内入り口(勝瀬10・1)

松風に豪族ねむる瓢塚

瓢箪塚古墳(上浜田古墳群第7号墳)

市内最大の前方後円墳です。全長71メートル以上、後円部の高さ約7メートルと推定されています。その大きさから上浜田古墳群の盟主の墓と考えられ、出土した埴輪から、4世紀末～5世紀初頭にかけて造られたと考えられています。

【擬木柱所在地】ひさご塚公園内(国分南3・1055)

「海老名郷土かるた」ダウンロード版

市ホームページに印刷用ファイルを掲載しています。印刷・作成して遊びましょう。

郷土かるたページ

海老名むかしばなし 馬糞の土産

問シティプロモーション課 ☎046(235)4574

昔の農民は、肥料効果がなくて作物の収穫が著しく減少したり、病害が発生しやすくなった畑を「くせが出た」といって恐れたが、その原因が土壌の中の微量成分の欠乏であるとは気がつかなかった。

しかし、海草を堆肥に混ぜて使うとこのくせが消えることを知っており、農閑期にはわざわざ南湖(茅ヶ崎市)の浜まで海草を買いに行ったものである。

海草と言っても食用にならないホンダワラで、これは他の海草と一緒に海岸へ打ち上げられるが、漁師たちにとっては邪魔なものだから天日で乾燥して燃やしたものである。従って、欲しいと言えば乾かしてまとめておいてくれたし、ほんの手間賃だけで売ってくれた。

一方、農家ではどこの家でも宅地内に棕櫚の木を植えていたが、この繊維は丈夫で腐りにくいので、海辺の漁師たちにとっては網の修理や力綱には欠かせないものだった。

ある農民が棕櫚の皮を車に積み、あと押しに子どもを連れて南湖へ海草を買いに行ったときのことである。棕櫚皮の量が多かったので、漁師は海草の代金を受け取らないばかりか、しこという小鰯を三束も平籠に入れて土産にくれた。一束とは小さいものや細かいものを数える百を単位とした昔の数え方で、三束は鰯三百尾である。

漁師のすすめるままに積めるだけ積んだので荷が重い上に、田舎のでこぼこ道である。子どものあと押しぐらいでは大八車は思うように進まず、門沢橋にたどり着いたころは、日はとっぷりと暮れてしまった。馴れている道なのに、どこでどう間違えたのか気がついたときはいつもとは違った道に迷い込んでいた。

しかし、余光に浮かんでいる大山を左に見て北へ進めばやがて社家へ出るだろう、と汗を拭き拭き道を急ぐと、ちょうど道端の茶店で爺さんが団子を焼いていた。その団子につけた醤油の焦げた匂いが空腹の親子にはたまらなかったので、ひと休みしていくことにして団子を注文し、親子でふた皿ずつ平らげた。

あんまりうまいので、家族の土産にしようと思って頼むと、「今日はこれだけしか作っておかなかったので、もうおしまいです」という。

そのとき裏手のほうから、婆さんがおはぎを入れた四角な折り箱を持って出て来て、お金はいらないから車の鰯と交換しようと言った。どうして鰯が積んであるのを知っているのか考えてみれば疑問がわくはずだが、そんな深いことも考えず、無造作に車からひと籠降ろしておはぎと交換した。

我が家へ戻った親子は、残っているはずのふた籠の鰯が姿を消しているのにびっくりしたが、さらに、家族を喜ばせようと思って交換してきたおはぎが、新仏に供えたお葬式の折り箱に詰めた馬糞であったのには、空いた口がふさがらなかった。

その後、迷い込んだ辺りの道を何度か通ってみたが、そこはお寺の墓地裏で茶店などあるはずのない寂しい農道だった。

さて、滅法うまかったあのときの団子は何だったのだろうか。後でこの話を聞いた物知りの老人は、「うまかった団子は本物で、おそらく葬式のとき墓前に供えた枕団子(※)を狐が利用したものだろう」と言ったそうである。

(※)田舎では人が死ぬと、通夜の晩に死者の枕元へご飯とともに茶椀に山盛りの団子を供え、葬式の当日この膳部を長男の嫁が持って墓地までひつぎを送る風習があった。この団子はそのまま墓前に置いてくるが、故人が生前、幸福だったり長寿だったりすると、これにあやかりたいという意味で、会葬者がこの団子を分けて持ち帰ることもあった。

※原文を参考に一部編集しています。

(こどもえびなむかしばなし第4集より)

海老名むかしばなし第2～9集を市役所地下売店で販売中(各300円)